

聖書箇所：ルカの福音書 5章 27～39節

説教題：罪人を招くために

### 1 パリサイ人たちからの質問

#### (1) なぜ罪人と食事をするのか

イエスはレビという取税人に目を留められ、「わたしについてきなさい」と声をかけられます。レビはこれを聞くと、何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従っていきます。このレビ、実はこの後マタイと名を改めます。後に使徒の一人となり、マタイの福音書を書いたそのマタイであると考えられています。

それまで取税人であったレビがなぜすぐに従うことができたのか、不思議な気もします。また今日の後半のほうには古いものと新しいものたとえも出て来ます。しかし今日はその事には触れることはできません。パリサイ人からの質問に対し、イエスはどうか答えられたのか。その意味は何であったのか。そのところに焦点を当てていきます。

レビはすぐにイエスを自分の家に招くことにいたしました。レビは最初イエスとその弟子たちだけを招くつもりだったのだらうと思います。しかし、イエスは大ぜいのお客さんをパーティーに連れて来ました。だれが来たのかと見ると、他の取税人たちといわゆる罪人と称される人たちでした。パリサイ人たちは、常々イエスの行動を観察し、少しでもおかしいことをしたり、言ったりしたら、クレームをつけイエスの評判をおとしめようと狙っております。イエスが罪人たちといっしょに食事をされているのを見ると、これは格好のチャンスと意気込み、このように言います。「なぜ、あなたがたは、取税人や

罪人どもといっしょに飲み食いするのですか。」

#### (2) 罪人とは誰か

ここで問題なのが「罪人」ということばです。いったい罪人とはだれのことを言うのか。パリサイ人、律法学者たちが、罪人のリストとして真っ先に挙げているのは取税人です。そこには彼らなりの理由があります。ローマ帝国に納める税金ユダヤ人たちから取り立てる、それが取税人の仕事です。ユダヤ人たちの目には、自分たちを裏切り、外国の手先となって働く売国奴に映ります。そればかりではない。彼らは、取り立てた税金をごまかし、その一部を自分の財布に入れて私腹を肥やしていました。そんなことを聞いたら私たちは波どう思いますか。「それはひどい人たちだ。そんな人たちとは絶対につきあいたくない。」そう思うでしょう。

こうして見ますと、イエスが食事の席に連れて来た人たちがどんな人たちであったのか、大体想像することができます。おそらく今私たちが見ても、「こんな人といっしょに。。。と躊躇するような人たちが大ぜい含まれていたのだらうと思います。

パリサイ人にとって、罪人と一緒に食事することは罪を犯すのとまったくおなじ事です。ですから、イエスが罪人と呼ばれる人たちといっしょに食事をするのを見て腹を立てたのは当然でした。

### (3) なぜ断食しないのか

パリサイ人たちの怒ったのは、そればかりではありません。もう一つ原因がありました。「あなたの弟子たちはどうして断食をしないのか。」パリサイ人たちは一週間に二回断食をしていたと言われます。パリサイ人たちの考え方からすれば、神を信じるといふのなら当然断食をきちんと守るべきだということになります。ところがイエスたちは全然断食をしない。神をないがしろにするその態度はどうなんだ。そんな疑問をぶつけていきました。

## 2 イエスの答え

### (1) 罪人を招くために

イエスはまず、どうして罪人と一緒に食事をするのかという質問に対し 31, 32 節でこう答えられます。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」

「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。」これはもう説明するまでもなく、当たり前のことです。イエスはこれを下敷きにして、「丈夫な人」を「正しい人」に、そして「病人」を「罪人」ということばに置き換えています。では医者とは誰のことになるのか。「わたし」イエス。そのように読めます。イエスは、罪によって病んでしまった私たちをいやすために医者として私たちのところに来てくださった。そこまではわかる。そして病人である罪人とは私たちのことだとも聖書を読んでいれば何となくわかる。

引っかかるのは次のことばです。「悔い改めさせるために来た。」なんとなく落ち着きません。上から下に向かって〇〇させるとい

うように言われているようで、正直に言えばそれだけでいやになります。イエスは、悔い改めることを強制するために来られたのか。もしそうでないとしたら、ではいったいどのようにしてこの方は私たちを悔い改めに導こうとされるのか。その事はまた後で考えます。

### (2) 花婿が取り去られるとき

パリサイ人たちの二つ目の質問、断食についてイエスは 34, 35 節でこう答えられます。「花婿がいつしよにいるのに、花婿に付き添う友達に断食させることが、あなたがたにできますか。しかし、やがてその時が来て、花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します。」

日本でもユダヤの文化でも結婚式の披露宴ではごちそうが振る舞われます。結婚披露宴なのに食事をとらずに空腹をこらえて苦々しい顔をする人はいません。これも常識的なことです。そこまではよい。

さて問題は、花婿とはだれなのか。花婿に付き添う友達とはだれなのか。そのことは考えなければなりません。でもそれほど難しくはない。というのは、今罪人と呼ばれている人たちが宴会に招かれ、食事をしているのです。どうやら花婿に付き添う友達とは宴会に招かれている罪人たちのことを指しているとわかります。

では花婿とは誰か。私たちが結婚披露宴を開くとき、お招きしたい方々に招待状を送ります。だれの名前で招待状を出しますか。当然、結婚するふたりの名前で招待状を書きます。そうしますと、花婿とは、この宴会に罪人たちを招待した方になる。それはイエスでした。

でもどうですか。自分のことを説明するために、自分のことを花婿だと言うのはどうなのか。ちょっと首をかしげたくになります。ところが、イエスはこう続けます。「しかし、やがてその時が来て、花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します。」

結婚式が済んだら幸せな家庭生活が始まるわけではありません。花婿が取り去られると言います。この時点で、イエスが語ったことを理解した者はひとりもいません。ご自分のことを花婿とたとえています。どこまでも祝福された花婿ではない。この先に暗い影が漂う花婿としてご自分のことを説明されます。

### 3 悔い改めさせるために来たのです

#### (1) どのようにして

今、二つの質問に対するイエスの答えを見てきました。わからないことがありました。この方は私たちを悔い改めさせるために来られた。いったいどのようにしてなのか。そして取り去られる花婿とはどういうことか。なぜそのときに断食すると言われるのか。

考えるヒントは、すべてレビの家にあります。パリサイ人たちが罪人と呼ばれていた人たちが宴会に招かれ、食事をしていました。招いてくださったのはイエス。イエスは罪人と呼ばれている人たちと食事をされました。

招かれたのは尊敬されていた人たちですか。いいえ違います。人々は、町で見かけても目を合わせようとしない。そんな人たちです。身なりが整った人たちでしたか。いいえ。すべてではないにしても中にはみすぼらしい身なりの人たちもいました。思わず鼻を押さえたくなるくらい垢にまみれた人もいたでしょう。こんな人たちとっしょに食事を

することなどできない。もし実際にそんな人がそばにいたら生理的に受け付けられない。近寄りたくもない。食事などもつてのほか。おそらくそう感じる人たちです。

ところがイエスはこうされたか。喜んでいっしょに食事をされました。

#### (2) イエスが取り去られるとき

少し聖書をご存じの方は、疑問に思うでしょう。この人たち、イエスとっしょに食事をして終わりですか。罪の悔い改めはいつたいどうしたのですか。イエスは何もされないのか。

もちろん、そんなことはありません。イエスははっきりとされています。「わたしは罪人を招いて、悔い改めさせるために来たのです。」悔い改めこそイエスが私たちのところに来られた大きな目的だと言われています。

ではこの宴会場に集まった人たち、いったいいつ悔い改めるのでしょうか。このままおいしい食事をして終わりなのでしょうか。それとも食事をしてから、請求書が回ってきて、高額な料金を支払うことになるのでしょうか。まさかそんなことはありません。

この人たちばかりではありません。私たちはいつどのようにして悔い改めに導かれていくのか。その事を最後に考えます。

イエスはこのようなことばで説明しています。「しかし、やがてその時が来て、花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します。」

宴会はずっと続くわけではありません。やがて花婿が取り去られるときが来るとイエスは予告されました。それが具体的にどんな事を意味するのか、私たちは知っています。

イエスが、十字架におかかりになることです。私たちの花婿は十字架で死なれます。

その十字架を見て私たちは何を考えることになるでしょうか。イエスがかつて自分にしてくれたことを思い出すのではないですか。この方は、私を罪人呼ばわりして嫌うのではなく、むしろ友達と言ってくれた。宴会の食事の席に招いてくれて、いっしょに食事をしてくれた。そのときイエスはどんなだったろうか。そうだ、あのときイエスは心の底から喜んでおられた。いっしょに食事することを楽しんでおられた。人々は自分のことを罪人だと指さし、汚い者を見るようにしてだれも寄りつこうとしなかった。まして友達になろうという者はだれもいなかった。でも、イエスだけは違った。この方は、何も非難しない。何もとがめない。ありのままの自分をそのまま受け入れ、喜んでくれた。

そこまでしてくれたイエスが、いま十字架で苦しんでおられる。なぜ十字架で死ぬのだろうか。あそこで死ななければならぬのは私のほうではなかったのか。あの方は私たちの罪を背負われ、私たちの身代わりとなってさばきを受けておられる。そのことをあの方はかつて私に語っただろうか。いや、何も語ろうとしなかった。沈黙されていた。でもいま、十字架を見て初めて気がついた。こんな汚れた自分のことを愛してくださり、いのちまで捨ててくださろうとしている。

十字架を見たとき、食事に招かれた人たちは初めて気がつきました。神のひとり子である方がどれほどの愛で私たちを愛してくださっていたのか。その方が十字架で死んで行かれます。取り去られていきます。悲しまない人がいるでしょうか。いいえ。みな悲しみます。どれだけ悲しみますか。食事ものを

通らないくらいです。

これでおわかりでしょうか。「花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します。」十字架を見上げたとき、私たちはだれから命ぜられなくても、食事をすることができなくなります。十字架を見上げたとき、悔いる者に導かれている自分を発見します。

「(わたしは) 悔い改めさせるために来たのです。」イエスは本当に不思議な、想像もなかったような驚くべき方法で悔い改めに招いてくださっていたのです。この方は、ご自分のからだを十字架にささげるだけです。私たちに何も言いません。何も責めません。ただいっしょに食事ができたことを喜んでおられる。そのようにして、私たちを十字架に招いてくださっております。